第１章　研究の概要

第１節　研究の目的

近年、青少年における問題行動の増加は著しく、大変深刻な状況にあると言われている。例えば、オヤジ狩りと称される強盗行為や、テレクラ等を利用した援助交際などの性を手段とした金銭・高額商品獲得への傾斜、覚醒剤やマリファナ等の薬物乱用等々、一般の成人には理解しがたい問題行動が表面化している。そうした問題行動は、単独で行われるよりも、集団で行われる割合が非常に高いという。

現代青少年の示すそれらの問題行動の背景には、若者全般のライフスタイルや道徳観念、対人関係の変質が想定されるが、その関係軸を様々に設定し、調査・分析を行うことで、問題行動の理解を進める必要がある。

また、テレビや新聞などのマスメディアでは、そうした問題行動が中高生など、青少年においてはあたかも一般的な行動であるかのように報道されている。しかしながら、それは青少年実態を正確に捉えたものであるか疑問である。

青少年の問題行動への対応策を検討するためには、まず青少年のありのままの姿を正確に把握することが、もっとも基本的かつ重要なことであると考えられる。

本研究では、問題行動に対する青少年の意識と実態について明らかにするとともに、さまざまな背景要因との関連を検討することにより、現代青少年の問題行動対策のために有用な一資料を得ることを目的とする。

昨年度の調査では、問題行動の背景要因を設定した質問紙を作成し、予備的調査を行った。サンプルの少なさや偏りといった問題があり、高校生の問題行動の実態把握や、背景と考えられる仲間関係との関連については、検討することができなかった。そこで、本年度の研究では調査対象を拡大し、高校生の問題行動の実態とその背景要因について、調査・分析を行うことを目的とする。

第２節　調査の枠組み

本調査では、青少年の問題行動に関する心理学や社会学の知見、および昨年度までの調査結果をもとに、問題行動発生モデル（図Ｉ－１）を設定し、質問紙を作成した。各要因の概要については以下の通りである。

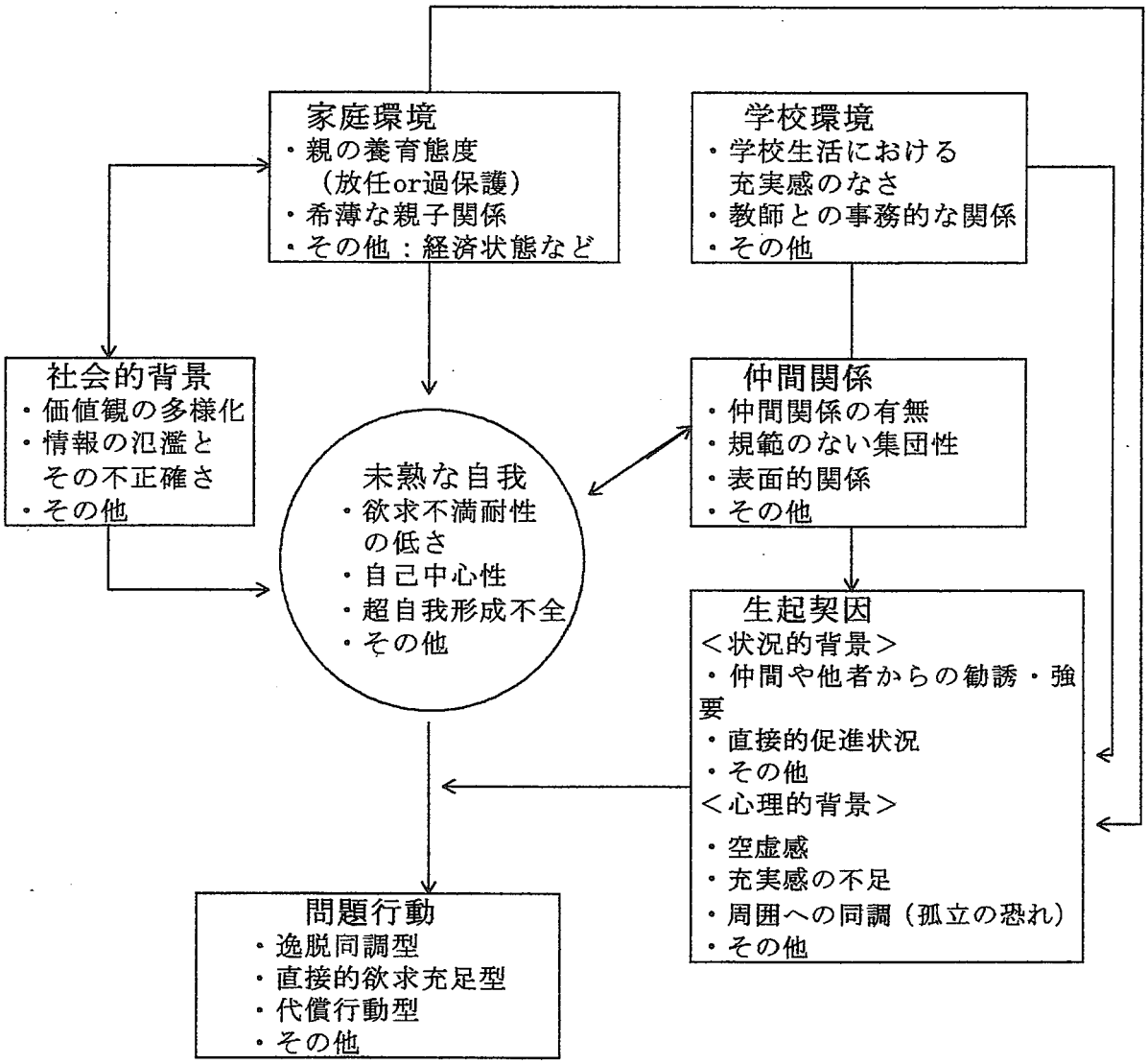
第1に、環境的背景を設定した。環境的背景としては、①家族構成や親の養育態度、親子関係状態などの家庭環境、②バイトや親からの小遣いによる経済状態、③授業に対する態度や教師との関係などの学校環境、④仲間関係の有無やその関係性などの仲間関係の4側面を設定した。これらの環境的背景は、高校生個人の心理に影響を与え、その心理が問題行動に対する意識や経験に影響を及ぼすというプロセスが仮説される。

第２には、我が国の社会全体における価値観の多様化などなど社会的背景を設定した。この要因については、質問紙による調査では測定することが困難なため、調査項目としては組み込むことが不可能である。しかし、決して見逃すことのできない影響力をもつ背景要因と仮説される。

第３に、問題行動の生起契因として状況的背景と心理的背景を設定した。これはたとえ

個人のパーソナリティが問題行動を起こしやすい傾向を持っていたとしても、促進要因が存在するとしないとでは、実際に行動を起こすに至る割合がかなり違っていると仮説されるためである。この考えをふまえて、状況的背景としては、仲間や他者からの勧誘・強要などを取り上げた。また、心理的背景としては、空虚感、充実感のもちにくさ、孤立の怖れからくる周囲への同調など、現代青年に特徴的な心理特性として取り上げた。

最後に個人の人格特性である。現代青年の特徴として、欲求不満耐性の低さ、自己中心性、道徳規範のなさなど、自我の未熟化傾向が多くの研究において指摘されている。非行との関連がつよいことも明らかとなっているこれらの特性を、個人の人格特性として取り上げた。実際に問題行動を起こすかどうかは、環境的背景、あるいは心理的背景のみが規定要因隣るのではなく、それらの背景と行動をもつ主体である個人の人格特性とが絡んだ複合的な要因によって影響されると考えられるからである。



図Ｉ－１　問題行動発生モデル